



Title	古典アラブ文法学における文法記述の方法論の展開 : al-Kitāb と al-Mufaṣṣalにおける条件文の記述から の一考察
Author(s)	森口, 明美
Citation	関西アラブ・イスラム研究. 2001, 1, p. 115-130
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105242
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古典アラブ文法学における

文法記述の方法論の展開

—— *al-Kitāb* と *al-Mufaṣṣal* における

条件文の記述からの一考察 ——

森 口 明 美 *

はじめに

イスラム成立後、時代の経過、社会構成の変化とともに、アラビア語に変化が生じ、コーランの正しい理解に支障をきたすことが多くなった。

すべてのムスリムに正しくコーランを理解させる目的で生まれたアラブ文法学は、*al-Kalīl* (d. 786ごろ) によって基礎が築かれ、*Sibawayh* (d. 803-804) の *al-Kitāb*『書物』で集大成された。その後、9~10世紀には、主として *al-Kitāb* に基づき、文法用語や研究方法の体系化が行われた。次いで11~15世紀には、もっぱらそれらの要約や再編集に関心が向けられた。つまり一般に、アラブ文法学は、*al-Kitāb* によって枠組みが完成され、その後は *al-Kitāb* の枠組みの中で、より分かりやすい文法書の成立へと発展したと見なされている。12世紀に *al-Zamakṣarī* によってまとめられた *al-Mufaṣṣal*『詳説』は、その一つであり、「*Sibawayh* の *al-Kitāb* にもられている項目のすべてを論じながら、しかも簡潔にして要領を得た教科書であり¹⁾」「今日のアラブ世界におけるアラビア語研究に直接的なかかわりを持つ²⁾」と評価されている。

本論文では、古典アラブ文法学における文法記述の特徴とその変化を検証するために、*al-Kitāb* (8世紀) と *al-Mufaṣṣal* (12世紀) の条件文に関する記述方法の比較観察を行う。条件文は、修士論文(森口, 1999)³⁾でも指摘したように、古典アラブ文法学の成立過程においてアラビア語が大きく変化したことを示唆する言語現象のひとつである。したがって、古典アラブ文法学では

* 大阪外国語大学大学院言語社会研究科後期課程3年

1) 池田 (1969), p. 42.

2) 池田 (1969), p. 41.

3) 森口 (1999), p. 77.

どのような枠組みであるいはどのような姿勢で、実際の現象を文法記述してきたかを分析する本目的に適当と判断し、決定した。さらにここでは、12~3世紀ごろのイスラム諸学における文法学の位置づけを理解するために *al-Mufaṣṣal* の注釈書である Ibn Yaʿīš (d. 1245) の *Šarḥ al-Mufaṣṣal* 『*al-Mufaṣṣal* の解説書』も利用する。

まず第1章では、アラブ文法学の発展の経緯を概観し、*al-Kitāb* と *al-Mufaṣṣal* が、これまでどのように評価され、利用されてきたかを確認する。第2章では、*al-Kitāb* と *al-Mufaṣṣal* の条件文に関する記述の比較を行う。第3章では、注釈書 *Šarḥ al-Mufaṣṣal* をもとに *al-Mufaṣṣal* の記述が当時のアラブ文法学でどのように解説されていたかを観察する。

以上の観察を通して、伝統的アラブ文法学における文法記述の方法論の展開を明らかにすることを本論文の目的とする。

1. アラブ文法学の発展に対する一般的評価

1.1. アラブ文法学の発展経緯

アラブ文法学は、7世紀のイスラム成立以降に始まった。時代が経過し、社会構成が変化するにつれて、アラビア語に変化が生じ、ムスリムとなった非アラブ人のみならず、アラブ人でさえコーランを正しく理解することに支障をきたすようになった。このような社会状況のもと、最初にアラブ文法学の基礎を築いたのは、*al-Duʿālī* (d. 688) だと言われている⁴⁾。彼はすべてのムスリムたちが正しくコーランを読み、理解できるように語末に短母音記号を添付することを考案した⁵⁾。このように語末の短母音を明確にすることがアラブ文法学の第一歩であった⁶⁾。母音記号は、*al-Duʿālī* の弟子 *Naṣr al-Layṭ* によって完成された⁷⁾。その後、*ʿĪsa ibn ʿUmar* (d. 761) が、アラビア語の文法に関する書物 *al-Ikmāl* と *al-Jāmiʿ* を書いたと言われているがそれらの写本は現存していない⁸⁾。

本格的な意味でアラブ文法学の基礎を築いたのは、*al-Kalīl* である。彼の

4) アラブの伝承では、最初にアラブ文法学の基礎を築いたのは、4代カリフ、*ʿAlī* とされている。それによると、*ʿAlī* は、初めて文法を学問として奨励し、*al-Duʿālī* に名詞 (*ʾism*)、動詞 (*fiʿl*)、辞詞 (*ḥarf*) の品詞に分けることを提唱した。Flügel はこの伝説を “ziemlich glaubwürdig” とし、Benfery もまったく疑う余地はないとしているが、確実な論証に欠ける。品詞の分類は、ギリシャ哲学の影響であり、それに関する最初の確実な資料は、*Sibawayh* の *al-Kitāb* と推測する (Goldziher, 1994, p. 3)。

5) 彼は書記にコーランを読む時の口の形に応じて点符号を書かせた。(al-Nassir, 1993, p. 3)

6) Goldziher (1994), p. 7.

7) al-Nassir (1993), p. 3.

8) al-Nassir (1993), p. 4.

文法理論は弟子 *Sibawayh* の *al-Kitāb* によって継承され、集大成された。つまり *Sibawayh* は、*al-Kitāb* の中に、先行学者の諸説等を集約し、整理し、彼らの用いた例証や、彼自身が聞いた例証詩などを章に分けてまとめたのである⁹⁾。以後、*al-Kitāb* は、アラブ文法学に多大な影響を及ぼし続けた。

10世紀になると、文法を一般的規則や原則に基づいて系統立てる必要が生じた¹⁰⁾。このより明瞭な規則化は、アラブ文法学の転機¹¹⁾と評価される一方で、単に新しい分類形式の導入にすぎず、文法理論の本質の発展ではない¹²⁾とも見なされている。

11世紀以降、10世紀に考案された規範の骨組みは、細かい点では推敲され改良されたが、文法内容そのものが十分に吟味され見直されることはなかった。つまり、新しい視点を開発することよりも、知識の蓄積と維持に関心が向けられて、一般的原則や定義が重視されたのである。それによって学ぶことを目的とした多くの文法書が書かれた。たとえば *al-Zamakṣārī* (d. 1144) の *al-Mufaṣṣal* には、アラビア語のあらゆる問題点が簡潔にまとめられている。また *Ibn al-Ḥajīb* (d. 1248) の *al-Kāfiya* と *al-Šāfiya* や *Ibn Mālik* (d. 1273) の *al-ʿAlfiya* は、覚えやすいように詩の形式に作りかえられた。しかしいずれも対句や韻律が用いられていたために、難解で、正しく理解するためには注釈書を必要とした。

それらの注釈書は、一般的原則に関連するあらゆる事象を盛り込む傾向から、今日的な観点から見ると取るに足りない言語現象まで詳細に議論されている反面、最も基本的な原理については、周知のこととして簡単な言及にとどまることも多かった。

以上から、古典アラブ文法は、8世紀に *Sibawayh* の *al-Kitāb* によって完結

9) 池田 (1968), p.131.

10) *falsafa* がイスラム世界における文化的主導権を握ったことで、文法学者たちは新しく、科学的でより知的水準の高い刺激を受けた。その一方で文法学の権威を守る必要が生じた。そのために、文法を原則や定義に基づいて体系化すること、そして *falsafa* に傾倒した読者にも文法をわかりやすく説明することが行われた。体系化は *uṣūl* と呼ばれ、*al-Sarrāj* の *Kitāb al-Uṣūl* が最初とされている。わかりやすく説明する方法は、*ʿilāl* と呼ばれ、*al-Zajjāji* (d. 951) の *Kitāb al-ʿIḍāḥ* や *Ibn Jinnī* (d. 1002) の *Ḳaṣāʾiṣ* 代表される (Bohas, 1990, pp.9-11)。なお *ʿilāl* については、本研究に密接には関係していないと判断し、本文中で言及しなかった。

11) *Suyūṭī* は、*Kitāb al-Uṣūl* について「*Ibn al-Sarrāj* の独創的な規範化が、アラブ文法学を転機へと導き、以後の教育的文法書の手本となった」と評価している (Owens, 1990, p.9)。

12) Owens は、「*Sibawayh* から *al-Sarrāj* までの約140年間にアラブ文法学は、洗練され、容易に理解しうるように系統立てられたが、*al-Sarrāj* が規範化した文法項目のほとんどすべてがすでに *Sibawayh* によって言及されている (Owens, 1990, p.242)。」すなわち「*Sibawayh* と彼以降の文法学者たちの違いは、程度の問題であって、本質ではない (Owens, 1990, p. 53)。」と主張している。*al-Qifṭī* によると、*al-Marzubānī* (d. 993) は、*al-Sarrāj* を「彼の論理学者の形式 (*lafẓ*) で資料を分類する方法 (*taqṣīm*) は、哲学者たちに賞賛されたが、彼は単にその (分類) 形式を導入したにすぎず、意味 (*maʿnā*) に関しては、*Sibawayh* の *al-Kitāb* に完全に依拠している。」と評価していた (Troupeau, 1983, p.143) というのである。

されてから、記述の方法や目的は徐々に変化しつつも、基本的な枠組みは継承され続けたと考えられている。

1.2. *al-Kitāb*¹³⁾『書物』の評価

al-Kitāb は、著者 *Sibawayh* の恩師である *al-Kalil* の文法知識を基礎とし、コーランやジャーヒリーヤのアラブ古詩、その当時のベドウィンの言語観察をコーパスとした総括的な文法書である。簡潔ではあるが、時に曖昧な独特の文体で書かれていたために、彼の弟子である *al-Akfaš* (d. 823) でさえその難解さを「私は生まれたときからずっとこれについて問い続けている。」と表現した¹⁴⁾と言われている。また彼と同時代の学者、*al-Mubarrad* (d. 898) が *al-Kitāb* を大海にたとえた逸話¹⁵⁾も有名である。その他にも数多くの文献で、アラブ世界における *al-Kitāb* の絶大な影響力を実証する記述¹⁶⁾が見られる。

西欧において本格的なアラビア語の文法学が研究されたのは、1950年代以降である¹⁷⁾。にもかかわらずそれ以前の1880年代にすでに *al-Kitāb* は、ヨーロッパやエジプトで発行され、*Jahn* によってドイツ語に翻訳されていた¹⁸⁾。*Goldziher* は、*al-Kitāb* をアラビア語の代表的な文法文学の一つと評価した¹⁹⁾。アラビア語の文法学への関心が非常に薄かったこの時代にも、*Jahn* (1894) や *Hartmann* (1896) らによって *Sibawayh* の研究はされていた²⁰⁾。1950年以降では、*Fück* が、「ペルシャ人の文法学者 *Sibawayh* は、初めてアラビア語を包括的に記述した。その後アラビア語は拡大され、修正されるが、その基本が変わることはなかった²¹⁾。」と述べている。また *Fleisch* は、「*al-Kitāb* は教育を目的として書かれたものではなかったので、教科書として求められる秩序に欠け、文体も不十分で、一貫した明瞭な記述ではなかったが、初めてアラビ

13) *al-Kitāb* が書かれた正確な時期は不明だが、現存する最古の写本は170-180 (or 182) A.H.ごろである。正式な書名がなく、ただ *al-Kitāb* 『書物』と呼ばれ、以後その名で知られている。序文も結びもなく、当時一般的であった神や預言者への賛辞や執筆の日付や場所も記されておらず、単に「アラビア語の単語」(*mā al-kalima min al-ʿarabiya*) という章 (*bāb*) で始まっている。伝説によると当時のバスラの人々が「本を読んだ」と言えば、それは *Sibawayh* の *al-Kitāb* のことであり、文法のコーランと呼ばれていた (*al-Nassir*, 1993, p. 7)。

14) *al-Nassir* (1993), p. 7.

15) *al-Nassir* (1993), p. 7. 一般に、*al-Mubarrad* は著書 *Radd li-Kitāb Sibawayh* で最初に *Sibawayh* を批判したと言われている。しかし後に彼は、その批判を撤回した。*Ibn Jinnī* によると、その理由を「*Radd li-Kitāb Sibawayh* を書いたときは若すぎたが、年をとって分別が増して考えが変わった」と答えたということである (*Bernard*, 1987, p.40-41)。

16) *al-Nassir* (1993), p.7-8.

17) *Goldziher* (1994), p. xviii.

18) *Goldziher* (1994), p. xvii.

19) *Goldziher* (1994), p. xvii.

20) *Goldziher* (1994), p. xvii.

21) *Fück* (1955), p.44.

ア語に文法という新しい概念を示した²²⁾。」と評価している。一方その後の文法家たちについては、Sibawayh の理論を再編集したにすぎない²³⁾と見なされてきた。Carter は、Sibawayh の方法論を西欧においては20世紀まで知られていなかった直接構成要素分析²⁴⁾と非常に類似していると分析しており、「イスラム初期における制約された文化的背景の中で、Sibawayh は古典アラビア語に関する完全なる記述を達成したが、後の文法家たちはその記述を標準的なまた規範的な文法へと変えてしまった²⁵⁾。」と述べている。

Sibawayh と彼以降の文法家たちの間で異なった文法用語が用いられており、Troupeau, Mosel, Levin, Owens らが詳細に分析している²⁶⁾。しかし一般には、その違いは、単なる表現上の相違にすぎないとされている²⁷⁾。

以上のように、アラブ世界だけでなく、西欧においても、一般に、古典アラブ文法の枠組みは、*al-Kitāb* の枠組みの延長線上に存在するものと考えられている。

1.3. *al-Mufaṣṣal* 『詳説』の評価

al-Kitāb については、15世紀までに50以上の解説書が書かれ²⁸⁾、注釈や見直しが繰り返されてきたのに対して、Sibawayh 以降の文法家たちの業績については、*al-Kitāb* の体系化と再編集ということばでまとめられてきた²⁹⁾。すでに述べたとおり、12世紀以降、学びやすい文法書が数多く書かれたが、*al-Mufaṣṣal* はその一つである。

22) Fleisch (1961), p. 39..

23) Bohas (1990), p. 5.

24) アメリカ構造言語学の代表的な分析原理。石橋 (1977), pp. 406-410を参照。

25) Carter (1973), p. 146.

26) Versteegh (1993) は、Sibawayh と彼以降の文法家たちの用語法の比較研究について以下のように言及している。Troupeau は、数多くの用語が、Sibawayh の時代には知られていなかったか、あるいは、何らかの理由で使われていなかったことを明らかにした。Mosel は、Sibawayh が language と metalanguage の違いを認識していなかったと分析した。Levin は、musnad と musnad ṭilayhi の意味の変化を指摘した。Owens は、アラブ文法学は一つの語彙に一つの用語が対応するように発展する傾向にあると分析した。

27) Bohas (1990) は、先行研究や独自の分析をもとに、認識動詞や語順を例として従来の見方の見直しを提唱した。しかし認識動詞や語順は、主に方法論の違いであり、それだけで文法理論の概念の発展と見なすには無理があるように思われる。また彼は、*al-Kitāb* のもっとも顕著な特徴として、語の評価が複雑で、あいまいであると指摘している。しかし、本研究における観察では、11世紀以降の *al-Mufaṣṣal* や *Šarḥ al-Mufaṣṣal* でも *al-Kitāb* と同じ評価方法が見られたので、複雑な語の評価が *al-Kitāb* に特徴的であるかについては、再度検討する必要がある。

28) *al-Kitāb* の校訂者 Hārūn は、taqdim (前置き) の中で、9~15世紀に *al-Kitāb* の注釈や *al-Kitāb* に用いられている例証の解説、およびそれらを要約した51人を挙げている。(Sibawayh, vol. 1, pp. 37-43)

29) 実際には、Sibawayh が、文法の規則や方法を定めた。一方、その後の文法家たちの貢献は、単に彼の理論をより分かりやすく、系統立てて説明したり、新しく適応させたりすることに過ぎなかった。(Bohas, 1990, p.5)

al-Mufaṣṣal は、1119-1121 A. D. ごろ、*al-Zamākṣārī* (d. 1144) によって書かれたとされている。その後、各地で注釈付あるいは注釈なしの写本³⁰⁾が作られた。「特に *Ibn Yaʿīš* (d. 1245) の *Šarḥ al-Mufaṣṣal* が完成されてからは、規範文法の手本となり、従来あった文法学の著書はかえりみられなくなり、*Sibawayh* の *al-Kitāb* でさえ、少数の学者を除き、もはや研究されない状態になった³¹⁾。」と評価されている。

「徹底的だが簡潔で明解な解説³²⁾」, 「*Sibawayh* の *al-Kitāb* の要点をすべて伝えるのに成功した³³⁾」, 「*Sibawayh* の *al-Kitāb* にもられている項目のすべてを論じながら、しかも簡潔にして要領を得た教科書³⁴⁾」など、*al-Mufaṣṣal* は、*al-Kitāb* の内容をわかりやすくまとめ上げた文法書と見なされている。

2. *al-Kitāb* と *al-Mufaṣṣal* の条件文に関する記述の比較

第1章で、アラブ文法学の枠組みは、8世紀に *al-Kitāb* によって確立され、*al-Mufaṣṣal* は、4世紀という時の経過にもかかわらず、基本的には、*al-Kitāb* の枠組みを継承したという一般的評価が明らかとなった。

本章では、*al-Kitāb* と *al-Mufaṣṣal* の記述内容を比較することで、具体的に *al-Mufaṣṣal* が *al-Kitāb* のどこをどのように発展させ、何を継承し続けたかを観察する。

2.1. 条件文に関する記述の概要

表 I に、*al-Mufaṣṣal* と *al-Kitāb* の条件文に関する記述の主要な部分を原文から引用し、比較対照させた。表 II は、表 I を集約したものである。

2.2. *al-Kitāb* と *al-Mufaṣṣal* の相違点の観察

(a) 用語

al-Mufaṣṣal では、いわゆる条件節を *šarṭ*, 帰結節を *jazāʾ* と明確に定義されている。一方、*al-Kitāb* には、‘用語の定義’の概念が非常に薄い。たとえば *jazāʾ* について見れば、明らかに条件節 (*al-Mufaṣṣal* の *jazāʾ* に対応する) を

30) *al-Mufaṣṣal*, gedr. noch Alexandria, 1291, (ed. Ḥamza Faṭḥallāh), Dehli, 1891, 1903, mit Cmt. al-Muʾauwal v. M. Abdalḡanī, Calcutta, 1322, mit hindust. Einleitung v. ʿA. b. al-ʿImādi, Lucknow, 1323, Kair, 1323 (GAL, 1973, p. 509).

31) 池田 (1969), p. 42.

32) Brockelmann, EI., p. 1206.

33) Fleisch (1961), p. 40.

34) 池田 (1969), p. 42.

表 I

	<i>Al-Mufaṣṣal</i>	<i>al-Kitāb</i>
① 分類	حَرْفًا أَلْشَّرَطُ ومن أصناف الحرف حَرْفًا الشرط	هذا باب أَلْجَزَاءِ
② 対象 定義	وهما إِنْ وَلَوْ تَدْخُلَانِ عَلَى جُمْلَتَيْنِ فَتَجْعَلَانِ الْأُولَى شَرْطًا وَالثَّانِيَةَ جَزَاءً خَلَا أَنْ إِنْ تَجْعَلَ الْفِعْلَ لِلْاِسْتِقْبَالِ وَأَنْ كَانَ مَاضِيًا وَلَوْ تَجْعَلُهُ لِلْمُضِيِّ وَأَنْ كَانَ مُسْتَقْبَلًا	فَمَا يُجَازَى بِهِ مِنَ الْأَسْمَاءِ غَيْرِ الظُّرُوفِ؛ مَنْ، وَمَا، وَأَيْتُهُمْ وَمَا يُجَازَى بِهِ مِنَ الظُّرُوفِ؛ أَيُّ جَيْنِ، وَمَتَى، وَأَنَّى، وَخَيْتُمَا وَمِنْ غَيْرِهِمَا؛ إِنْ، وَإِذْمَا
③ ‘in に おける 動詞 形式	ولا يخلو الإعلان في باب إِنْ مِنْ أَنْ يَكُونَا مُضَارِعَيْنِ أَوْ مَاضِيَيْنِ أَوْ أَحَدُهُمَا مُضَارِعًا وَالْأُخْرَى مَاضِيًا فَإِذَا كَانَا مُضَارِعَيْنِ فَلَيْسَ فِيهِمَا إِلَّا الْجَزْمُ وَكَذَلِكَ فِي أَحَدِهِمَا إِذَا وَقَعَ شَرْطًا فَإِذَا وَقَعَ جَزَاءً فَفِيهِ الْجَزْمُ وَالرَّفْعُ	وَأَعْلَمَ أَنَّ حُرُوفَ الْجَزَاءِ تَجْزِمُ الْأَفْعَالَ وَيَنْجِزِمُ الْجَوَابَ بِمَا قَبْلَهُ
④ ‘in の 帰結節	وَأَنْ كَانَ الْجَزَاءُ أَمْرًا أَوْ نَهْيًا أَوْ مَاضِيًا صَحِيحًا أَوْ مُبْتَدَأً وَخَبَرًا فَلَا يَدْ مِنْ أَلْفَاءٍ وَقَدْ تَجَىءَ مَحْذُوفَةً فِي أَلْشَّدُودِ	وَأَعْلَمَ أَنَّهُ لَا يَكُونُ جَوَابُ الْجَزَاءِ إِلَّا بِفِعْلِ أَوْ بِأَلْفَاءٍ
⑤ ‘in	ولا تُسْتَعْمَلُ إِنْ إِلَّا فِي الْمَعَانِي الْمَحْتَمَلَةِ الْمَشْكُوكِ فِي كَوْنِهَا	فَإِنْ أَبَدًا مُبْهَمَةً وَرَعَمَ الْخَلِيلُ أَنَّ إِنْ هِيَ أُمُّ الْجَزَاءِ
⑥ ‘in+mā	وتجىء مع زِيَادَةِ مَا فِي آخِرِهَا لِلتَّكَايِدِ	_____
⑦ 疑問詞 との 相違点	والشرط كَالْاِسْتِفْهَامِ فِي أَنْ شَيْئًا مِمَّا فِي حَيْزِهِ لَا يَتَقَدَّمُهُ	الْفِعْلُ لَيْسَ فِي الْجَزَاءِ بِصِلَةٍ لِمَا قَبْلَهُ كَمَا أَنَّهُ فِي حُرُوفِ الْاِسْتِفْهَامِ لَيْسَ صِلَةٌ لِمَا قَبْلَهُ
⑧ 帰結節	ولا يَدْ مِنْ أَنْ يَلِزَّهُمَا الْفِعْلُ	_____
⑨ その他	وَرَعَمَ الْفَرَاءُ أَنْ لَوْ تُسْتَعْمَلُ فِي اِسْتِقْبَالِ كَانِ وَقَدْ تَجَىءَ لَوْ فِي مَعْنَى اَلنَّمْيِ وَأَمَّا فِيهَا مَعْنَى الشَّرْطِ وَإِذَنْ جَوَابَ وَجَزَاءَ	_____
		وَرَعَمَ أَنَّهُ لَا يَحْسُنُ فِي الْكَلَامِ إِنْ تَأْتِي لِأَفْعَلٍ مِنْ قَبْلِ أَنْ لَا فَعْلَ تَجَىءَ مُبْتَدَأً فَلَوْ قُلْتَ: إِنْ أَتَيْتَنِي لِأَكْرِمَتِكَ، وَإِنْ لَمْ تَأْتِنِي لِأَعْمَتِكَ جَازَ لِأَنَّهُ فِي مَعْنَى لِيْنِ أَتَيْتَنِي لِأَكْرِمَتِكَ وَلِيْنِ لَمْ تَأْتِنِي لِأَعْمَتِكَ فَإِنْ قُلْتَ: لِيْنِ تَفْعَلْ لِأَفْعَلٍ قَبْ، لِأَنَّ لِأَفْعَلٍ عَلَى أَوَّلِ الْكَلَامِ

表 II

	<i>al-Mufaṣṣal</i>	<i>al-Kitāb</i>
① 分類	ṣarṭ の (意味をあらわす) 2つの ḥarf	jazā' の項
② 対象	ḥarf (ʿin , law) に限定	ḥarf 以外も含む 名詞 man, mā, ʿayyu-hum, ʿayyu ḥinin, matā, ʿayna, ʿannā, ḥayṭu mā 名詞以外 ʿin , ʿid mā
定義	あり jumla ʿulā ⇒ aṣarṭ jumla tāniyaiya ⇒ jazā' ʿin = al-ʿistiqbāl law = al-muḍiyy	なし jazā'—jawāb al-jazā' が, <i>al-Mufaṣṣal</i> の ṣarṭ—jazā' に, 対応する
③ ʿin にお ける動 詞形式	条件節-帰結節の動詞形式を明示 ※ 可能な形式の組み合わせ 完了形—完了形 要求法—要求法 完了形—要求法 要求法—完了形	明示的な記述はなし ・条件の ḥarf によって動詞は要求法 となり, 帰結節はその前のものによ って要求法となる ・用例の列挙
④ ʿin の 帰結節	fa を伴う条件を明示 ʿidā が fa の代わりをすることがある	動詞または fa で始まる ʿidā が fa の代わりをすることがある fa-ʿidā となるのは qabiḥ である
⑤ ʿin	ṣukūk (doubt , suspicion)	mubhama (obscure , vague) ʿin は ʿumm al-jazā' である
⑥ ʿin+mā	ʿin は強調のために mā を伴うことが ある	
⑦ 疑問詞 との 類似点	語順が同じ 条件節—帰結節 疑問詞は文頭に来る	どちらも後続の動詞と関係を持た ない
⑧ 帰結節	ʿin , law の後には必ず動詞が来る	
⑨ その他	・ al-Farrā' は, law が ʿin と同じく al- mustaqbal の場合があると述べて いる ・ law には願望の意味もある ・ ʿammā … fa と ʿidan は条件の意味 を含む ・ [ʿin+la-強調形] [la-ʿin+la-強調形] についての言及はない	・ law についての言及はない ・ ʿammā … fa と ʿidan については別 項で言及 ・ [ʿin+la-強調形] [la-ʿin+la-強調形] の用例を含む

指す場合³⁵⁾、条件文全体(条件節と帰結節)を指す場合³⁶⁾、条件の接続詞のみ³⁷⁾を指す場合がある。このようにひとつの用語に複数の解釈が可能なので正確な意味は文脈から判断せざるを得ない。

(b) 構成

i) 全体における条件文の章の位置づけ

al-Mufaṣṣal は、全体が、名詞 (ʾism), 動詞 (fiʿl), 辞詞 (ḥarf) の三部から構成され、さらに各部は章に分類されている³⁸⁾。条件文の章は、辞詞 (ḥarf) に含まれるため、たとえば関係代名詞など文脈によって条件の意味を表すものは含まれず、扱われる対象が、辞詞 (ʾin と law) に限定される³⁹⁾。

それに対して *al-Kitāb* では、章立て (bāb) の対象が‘属格の章’のように形態であったり、‘al-fā’の章’のように特定の語彙であったりする。そのため同じ説明が複数の章で反復されたり、一連の文法現象が一つの章にまとめられず、複数の章に分割されている場合も少なくない⁴⁰⁾。条件文は、‘al-jazā’の章’として言及されているので、条件を表すすべての語(名詞、副詞、辞詞など)が対象となっている。

ii) 条件文の章の構成

al-Mufaṣṣal は、条件文および条件詞の定義と9つの項 (faṣl) から構成される。それぞれの faṣl は、基本的原則とその例文から成る。用いられる例文は、原則どおりのごく一般的なものが多く、アラブ古詩からの引用は少ない。たとえば帰結節が fa- を伴う現象については、「もし帰結節が命令や禁止や本来的な完了や主語―述語の場合は、fa- が必要である。‘ʾin ʾatā-ka zaydun fa- ʾakrim-hu’⁴¹⁾(もしザイドがあなたのところに来れば、彼を歓迎せよ)’などのようにである⁴²⁾。」と説明されている。

al-Kitāb は、アラブ古詩からの例証とその解説から構成されている。例

35) jazā’ は、動詞が要求法であり、jawāb はその前のものによって要求法となる (Sibawayh, vol.3, p. 62)。

36) 条件文の章 (Sibawayh, vol.3, p. 62)。

37) ʾin は al-jazā’ の母である (Sibawayh, vol.3, p. 63)。

38) 章を表す特別な用語は使われず、min ʾaṣnāfi ism al-zamān (時の名詞の種類) や min ʾaṣnāfi ḥurūf al-istifhām (疑問の辞詞の種類) と表現されている。

39) al-Zamakṣari (1879), p.150.

40) 例えば「宣誓」については、6章に分割されて説明されているが、bi-llāhi (神に誓って) というフレーズについては、宣誓の章だけでなく、属格の章でも同じ説明が繰り返されている。

41) 帰結節 ʾakrim-hu が命令文なので原則どおり fa- を伴う。

42) al-Zamakṣari (1879), p.150.

証には、基本的な構文以外に、特異な例も多数引用されており、その解釈は、恩師である *al-Kalil* の見解に依拠する場合が多い。帰結節についての記述は「動詞または *fa-* で始まる⁴³⁾。」だけで、*fa-* を伴う場合については、「*ʿin taʿti-nī fa-ʿana šāhibu-ka*⁴⁴⁾ (もしあなたが私の所に来ればわたしはあなたの友である。)」の一例を挙げるだけである。*fa-* を伴わない用例については、「*al-Kalil* に '*ʿin taʿti-nī-ʿana karīmun*⁴⁵⁾ (もしあなたがわたしのところに来れば、わたしは歓迎する者である)'⁴⁶⁾」について尋ねたところ、それは詩の韻律のためにだけ許されると答えた⁴⁶⁾。」とだけ記述されている。

(c) 説明の方法

al-Mufaṣṣal では、たとえば条件節と帰結節の動詞の形態について、文法的と見なされる4とおりの組み合わせ (表 II ③ ※参照) が提示されているので、基本的な構文についての考察は可能である。ただしそれ以外の形態については言及されていない。

一方、*al-Kitāb* では、動詞の形態についてのまとまった記述があるわけではない。「条件節の動詞は要求法であり、帰結節はその前のものによって要求法となる⁴⁷⁾。」「もし *ʿin* が機能するなら、帰結節は必ず要求法となる⁴⁸⁾。」「*ʿin* 節の完了形や *lam*+要求法は、要求法と同じである⁴⁹⁾。」「詩においては帰結節の直説法は要求法と同じと見なされる⁵⁰⁾。」など章の中で別々に言及された複数の記述から総合的に可能な形態を判断させるやり方である。

したがって *al-Mufaṣṣal* では演繹法が、*al-Kitāb* では帰納法が主な説明の方法と考えられる。

(d) 語の評価

al-Kitāb は、構文の優劣を *ḥasan* (good) と *qabīḥ* (bad) で、意味の正誤を *mustaqīm* (right) と *muḥāl* (wrong) で示しているように、語の評価基準として当時の倫理学の手法⁵¹⁾を用いた。またそれぞれの統語機能は、通常、能動的

43) Sibawayh, vol.3, p.63.

44) Sibawayh, vol.3, p.63.

45) 前例と全く同じ構文である (帰結節が主語―述語) にもかかわらず *fa-* がない。

46) Sibawayh, vol.3, p.64.

47) Sibawayh, vol.3, p.62.

48) Sibawayh, vol.3, p.66.

49) Sibawayh, vol.3, p.68.

50) Sibawayh, vol.3, p.68.

51) Carter (1973), p.146-157. 彼によると Sibawayh は評価基準を以下のように定義している。What is right and wrong in speech. This comprises: right and good (*mustaqīm ḥasan*), wrong (*muḥāl*), right and untrue (*mustaqīm kaḍīb*), right bad (*mustaqīm qabīḥ*) and wrong and untrue (*muḥāl kaḍīb*).

なやり手と受動的な受け手の組み合わせで果たされる⁵²⁾と見なされていた。*al-Mufaṣṣal*においてもこの手法は継承されている。

また、一見無関係に思われる条件文と疑問文を比較する方法は、*al-Kitāb*に見られることから、伝統的であると考えられ、この評価方法も *al-Mufaṣṣal*でも使用されている。

(e) 条件文の統語的概念

al-Kitāb では、law 構文を条件構文として認めていない。law については、以下の3ヶ所で記述が認められたが、いわゆる非現実的な仮定を表す law の説明は、どの bāb にも見られなかった⁵³⁾。

① wa-l-raḥu jayyidun ‘alā ma‘na t-tamannī (Sibawayh, vol. 3, p. 36)

願望の意味なので主格は好ましい。

② ‘ammā (law) fa-li-mā kāna sa-yaqa‘u li-wuqū‘ ḡayri-hi (Sibawayh, vol. 4, p. 224)

(law) は別のことがらが起きることによって起こるであろうことに使われる。

③ ‘ammā (lammā) fa-hiya li-l-‘amri l-laḍi qad waqa‘a li-wuqū‘i ḡayri-hi, wa-‘innamā tajī‘u bi-manzilat law li-mā ḍakarnā fa-‘innamā humā li-btidā’ wa-l-jawāb (Sibawayh, vol. 4, p. 234)

(lammā) は別のことがらが起きることによってすでに起きたことに使われる、まさにそれはすでに述べた law と同じである。2 つは先行節と帰結節に使われる。

1. Right and good is when you say ‘ataytuka ‘amsi ‘I came to you yesterday’ or sa-‘ātika ḡadan ‘I shall come to you tomorrow.’

2. Wrong is when you contradict the beginning of your utterance with the end of it, e.g., *‘ataytuka ḡadan ‘I came to you tomorrow’ or *sa-‘ātika ‘amsi ‘I shall come to you yesterday.’

3. Right and untrue is when you say ḥamaltu l-jabal ‘I carried the mountain’ or šaribtu mā’a l-baḥri ‘I drank the water of the sea.’

4. Right and bad is when you put an expression in what is not its place, e.g., qad Zaydan ra’aytu ‘I have Zayd seen’ or kay Zaydun ya’tiyaka ‘that may come to you Zayd.’

5. Wrong and untrue is when you say *sawfa ‘ašrabu mā’a l-baḥri ‘amsi ‘I shall drink the water of the sea yesterday.’ (*は非文法)

イスラムでは、倫理学と法学は密接に関係するため、このような評価基準は、Sibawayh が法学を学んでいたことに関係があると述べている。さらに言語を擬人化して、単語の関係を ‘mothers’ ‘daughters’ ‘sick’ ‘well’ ‘alive’ ‘dead’ で表していることも指摘している。

52) Carter (1973) は、この Sibawayh のすべての発話を一対の単位と見なす方法を西欧においては 20 世紀まで知られていなかった直接構成要素分析と非常に似ていると分析している (Carter, 1973, pp.146-157)。

53) law に関しては、全記述を調査し、念のためネイティブにも確認済みである。

al-Kitāb の本文中には、条件を意味する *law* 構文そのものが用いられている⁵⁴⁾ことから、なぜ *law* の記述が含まれていないのか非常に疑問であるが、少なくとも、*Sibawayh* の記述が、すべての言語現象を反映していたわけではないことは明らかである。

一方、*al-Mufaṣṣal* は、*Sibawayh* 以降の文法家たちの意見や言語資料の見直しによって *law* を条件文の範疇に認めた。また *ʔin* を未来 (*al-ʔistiqbāl*), *law* を過去 (*al-muḍiyy*) と定義していることから、条件文構造は、*real conditional* (*simple conditional*) と *unreal conditional* (*imaginative conditional*)⁵⁵⁾ に区別されていたことが分かる。

2.3. 相違点のまとめ

al-Kitāb との比較から *al-Mufaṣṣal* の特徴は、以下のようにまとめられる。

- (a) 条件文や条件節と帰結節を定義したり、対象範囲を辞詞 (*ʔin* と *law*) に限定することによって、条件文の概念がより明瞭となった。
- (b) 規則的に章立てられ、さらに章は内容ごとに項 (*faṣl*) に細分化されたことで、記述の重複や分散が減少し、秩序立った構成が達成された。
- (c) 文法規則が単純に羅列されているだけなので、規則に反する、または規則と違う現象の解釈は、非常に困難である。
- (d) *al-Kitāb* では言及されていない *law* 構文を、条件文構造と定義した。

3. *Šarḥ al-Mufaṣṣal*

al-Mufaṣṣal が条件文において *ʔin* 構文と *law* 構文を対立させていることは、その記述から明らかであるが、2.3.(c)でも指摘したとおり、これだけで個々の用例をすべて理解し、応用するのはきわめて困難である。たとえば、*law* 構文に関する記述はきわめてわずかなので、*law* の定義は理解できても構文的な特徴を把握することはできない。その不足を補い *al-Mufaṣṣal* を正確に理解するために数多くの注釈書が書かれた。中でも *Ibn Yaʿīš* (d. 1245) の *Šarḥ al-Mufaṣṣal* は、最も有名である⁵⁶⁾。ここでは *Šarḥ al-Mufaṣṣal* の記述から、当

54) *al-Kitāb* の本文中には、*law* 構文は多用されている。*wa-law lam taḥmili l-kalāma ʿalal-l-ʾākiri la-qulta* (*Sibawayh*, vol. 1, p.76)/*law qulta ... kāna ḥasanan wa-law qulta ... lam yajuz. wa-kaḍālika law qulta ... lam yajuz* (*Sibawayh*, vol. 1, p.399)/*wa-law jāza-l-rafʿu la-qulta ...* (*Sibawayh*, vol. 1, p. 433) など。

55) 条件文における時制は、客観的時間ではなく、意欲実現の可能性に対応する(宮内, 1955, p. 53-61)。ここでは、未来、過去といった言葉が持つ客観的時間のニュアンスを避けるため、(Kinberg, 1977, p.4) および (Peled, 1992, pp.14, 40) の用語を用いた。

56) Brockelmann, EI., p. 1206.

時のアラブ文法学における言語現象の論じ方を観察する。

3.1. *Šarḥ al-Mufaṣṣal* の記述の特徴

- (a) *al-Mufaṣṣal* を項 (faṣl) ごとに引用して、パラフレーズおよび解説を加えた構成である。解説には、*al-Kitāb* への言及、バスラ学派とクーファ学派の学説、著者独自の見解など広範囲に渡る内容が盛り込まれている⁵⁷⁾。
- (b) たとえば帰結節の fa-ʾidā⁵⁸⁾ についての記述のように、しばしば本来言及すべき言語現象以外の現象について、冗長な理論が展開される。
- (c) law についての記述は、ʾin との比較において若干認められる⁵⁹⁾が、条件節と帰結節の動詞の形式など具体的な統語規則について *al-Mufaṣṣal* を補うような解説はない。
- (d) ʾin についての解説⁶⁰⁾や ʾin + 要求法⁶¹⁾についての解説によれば、*al-Mufaṣṣal* の記述を構文や動詞の形態に基づいて統語的に分析したものではない。
- (e) 語の評価基準は、*al-Mufaṣṣal* や *al-Kitāb* の方法を継承している。

3.2. 言語現象の論じ方

Šarḥ al-Mufaṣṣal の記述からは、当時のアラブ文法学では、言語現象を文

57) たとえば以下のような記述が見られる。「Sibawayh は、彼に讃えあれ、ʾin と ʾid mā を挙げている。そして ʾid mā を辞詞に数えている。しかし law について述べていない (Yaʿiṣ, juz. 8, p.155)。」
「そして彼の見解と同様、バスラ学派たちはそれが正しいとしている (Yaʿiṣ, juz. 9, p.10)。」
「そしてクーファ学派の al-Farrāʾ は、～という意見である (Yaʿiṣ, juz. 9, p.10)。」
「要求法に関しては、我々が述べたように (構文的に) 正しい、しかし直説法は (文法的に) 正しくない (Yaʿiṣ, juz. 8, p.158)。」

58) 帰結節の表示が ʾidā で代用される場合、その ʾidā に fa が接頭して、fa-ʾidā になる場合がある。
この fa についてさまざまな意見とそれについてのコメントを述べているが、本来のテーマである ʾidā については何ら説明されていない (Yaʿiṣ, juz. 9, pp.3-4)。

59) law についての全記述は以下である。

1. law も (ʾin と同様に) 条件の意味を持つ。なぜなら (ʾin と同じく) 帰結節が先行節の原因や理由となるからである。しかし (ʾin との違いは) law は、al-mumtaniʿ li-ʾimtināʿ gayri-hi であって、条件や被条件が存在するわけではないことである。law は (ʾin と違って) その後未来形がきても意味は過去に変わる (Yaʿiṣ, juz. 8, p.158)。

2. (ʾin と同様に) law の帰結節も省略される (Yaʿiṣ, juz. 9, p.7)。

3. law の後の語順が名詞ー動詞の場合も (ʾin と同様に) 名詞の前に動詞が隠されているのである (Yaʿiṣ, juz. 9, p.10)。

60) ʾin は本来的な条件詞であるために ʾin + S-V など構文の広がり自由である。条件以外の意味を持たないので、条件節の動詞の省略と同様、名詞によって ʾin と動詞が分離されることが許される (Yaʿiṣ, juz. 9, p.15-20)。

61) ʾin の直後に要求法が来なければならないのは lam や lammā 直後に要求法が来なければならないのと同じである (Yaʿiṣ, juz. 9, p.9)。

の構造に基づいて論じるのではなく、その説明に論理の一貫性が求められていたことが分かる。つまり、条件の接続詞の後には必ず動詞が来る⁶²⁾と論じた以上、名詞が来ることは許されず、その場合は「本来あるべき動詞が、表面上現れていないだけである⁶³⁾。」と説明するのである。そのため、結果的に今日的な観点から見れば、アドホックで矛盾した説明と考えざるをえない。

4. ま と め

これまで、アラブ文法学の枠組みを完成したのは、Sibawayh の *al-Kitāb* であり、その中にはコーランやアラブ古詩におけるあらゆる言語現象が網羅的に記述され、体系化されていると考えられてきた。またその後の発展といえば「学びやすい文法書」の作成にすぎず、文法体系そのものが発展したわけではないと見なされてきた。

しかし、今回の分析で、まず第一に *al-Kitāb* の記述は、文法書として完結はしているものの、条件文に関する限り、すべての言語現象を規則化しているわけではないこと、第二に *al-Kitāb* の規則化は完全ではなかったこと、第三に *al-Mufaṣṣal* は、対象範囲、用語の使い方、章の構成、説明の方法、用例の利用法などにおいて、*al-Kitāb* よりもより精緻な文法書であること、第四に *al-Mufaṣṣal* が Sibawayh 以降の研究発展を詳細に規則化することによって、*al-Kitāb* では記述されていない現象をも言及していることが明らかとなった。*al-Mufaṣṣal* によって抽象的であった古典アラビア語の文法概念が具体化されたことは明白である。それは、ペルシャで *al-Mufaṣṣal* の抜粋本⁶⁴⁾が書かれたのを始めとして、トルコ、イラクなど⁶⁵⁾でもアラビア語の基本を学ぶ共通の教科書として広く利用されてきたのみならず、今日のアラビア語研究に直接的な影響を及ぼし続けている⁶⁶⁾ことにも反映されている。

アラブ文法学が、Sibawayh の *al-Kitāb* によって基礎が築かれたことは間違いない。しかしその完成は、その後の規則化や体系化を経て、ようやく12~3世紀に実現したのである。

しかしながら *Šarḥ al-Mufaṣṣal* の記述が示すように、12~3世紀における文法学は、イスラム諸学の一つであったため、論理が言語観察に基づく分析よ

62) Ya'qūb, juz. 9, p. 9.

63) Ya'qūb, juz. 9, pp.9-10.

64) *al-Mufaṣṣal* の抜粋本である *al-Unmūdāj* が1269年に Teheran (? ママ) で書かれた (GAL, 1937, p. 510)。

65) Stambul, Sbath, Mōṣul, Tibriz, Palermo, Tübingen, Leipzig, Alger, Paris に写本がある (GAL, 1937, p.510)。

66) たとえば Wright は、Second Edition (1874の) 序文で、Ibn Mālik の *al-Alfiya* や *Lāmiyat al-Afā'il* と共に、彼が依拠した古典アラブ文法書として挙げている。

りも重視されていた。そのためアラブ文法学の枠組みは完成されたとはいえず、言語現象の解釈と説明には大きな制約があった。

さらに、今回の分析で、本来コーランを正しく理解するために始まった文法学が、コーランの言語現象のすべてを網羅しているわけではない可能性が出てきた。とするならば、そこに現れる言語現象を正確に把握するには、古典アラブ文法の枠組みを念頭に置きながらも、コーランを言語コーパスと位置づけて、直接観察し分析する必要がある。

したがって古典アラブ文法における文法記述の方法論の展開を本格的に解明するためには、コーランのアラビア語を詳細に観察することも今後の大きな課題の一つとなった。

[アラビア語の転写について]

アルファベット順に, ʾ/b/t/ṭ/j/h/k/d/ḍ/r/z/s/š/ṣ/ḏ/ṯ/z/ʿ/ġ/f/q/k/l/m/n/h/w/y を用いた。ただし引用部分は原文のとおりとする。

[参考文献]

ZA = Zeitschrift für Assyriologie, ZDMG = Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft

(一次資料)

- Ibn Yaʿīš (n.d.) *Šarḥ al-Mufaṣṣal*, al-Qāhira, Makt. al-Mutanabbī.
 Sibawayh (n.d.) *Kitāb Sibawayh*, 5 vols., Muḥammad Hārūn ed., Bayrūt, Dār al-Jil.
 al-Zamaḡṣārī (n.d.) *al-Mufaṣṣal fī ʿilm al-ʿarabiya*, (*ḏayluhu kitāb al-mufaṣṣal fī šarḥ ʾabyaṭ al-mufaṣṣal*, Muḥammad Badr al-Dīn), 2 ed., Bayrūt, Dār al-Jil.
 ——— (1879) *al-Mufaṣṣal fī al-naḥw*, 2 ed., J. P. Broch ed., Christiniae, Libraria P.T. Mallinġii.

(二次資料)

- Beeston, A. F. L. (1981) “Languages of Pre-Islamic Arabia”, *Arabica* 28, pp. 178-186.
 Benfey, T. (1869) *Geschichte der Sprachwissenschaft und orientalischen Philologie in Deutschland seit dem Anfange des 19. Jahrhunderts, mit einem Rückblick auf die früheren Zeiten*, München, J. G. Cotta'sche Buchhandlung. (Repri., New York, Johnson, 1965)
 Bernard, M. (1990) “The Basrian Grammarian ʾAbū ʿUmar al-Jarmī: His Position between Sibawayh and Mubarrad”, *Studies in The History of Arabic Grammar II, Proceedings of the 2nd Symposium on the History of Arabic Grammar, Nijmegen, 27 April-1 May 1987*, K. Versteegh and M. G. Carter eds., Amsterdam, John Benjamins B.V., pp. 35-47.
 Blanc, H. (1975) “Linguistics among the Arabs”, *Historiography of Linguistics*, Current Trends in Linguistics vol. 13, T. A. Sebeok ed., The Hague, Mouton, pp. 1265-1283.
 Bohas, G. and J.-P. Guillaume (1990) *The Arabic Linguistic Tradition*, London, Routledge.
 Brockelmann, C. (1937-1949) *Geschichte der arabischen Litteratur*, 2nd. ed., 5 vols., Leiden, E. J. Brill (GAL)
 ——— “al-Zamaḡṣārī”, In *First Encyclopaedia of Islam*, vol. 8, Leiden, E. J. Brill, pp. 1205-1207 (Brockelmann, EI.)

- Carter, M. G. (1973) "An Arab Grammarian of the Eighth Century A. D.", *Journal of the American Oriental Society* 93, pp. 146-157.
- ed. (1981) *Arab Linguistics*, Amsterdam, John Benjamins B.V.
- Cohen, D. (1962) "Koinè, Langues Communes et Dialectes Arabes", *Arabica* 9, pp. 119-144.
- Corriente, F. C. (1976) "From Old Arabic to Classical Arabic through the Pre-Islamic Koinè. Some Notes on the Native Grammarians' Sources, Attitudes and Goals", *Journal of Semitic Studies* 20, pp. 38-61.
- Fleisch, H. (1961) *Traité de philologie arabe vol. 1*, Beyrouth, Imprimerie Catholique.
- Flügel, G. (1862) *Die grammatischen der Araber: Erste Abtheilung. Die Schulen von Basra und Kufa und die gemischte Schule*, Leiptig, In Commission bei F. A. Brockhaus.
- Fraser, B. (1696) "An Analysis of Concessive Conditionals", *Papers from the Fifth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, pp. 66-75.
- Fück, J. W. "Ibn Ya'īš", In *the Encyclopaedia of Islam, new edition*, vol. 3, Leiden, E. J. Brill, p. 968. (Fück, EI.)
- (1950) 'Arabiya, Claude Denizeau trans., 'Arabiya: *Recherches sur l'histoire de la langue et du style arabe*, Paris, Librairie M. Didier, 1955.
- Goldziher, I. (1994) *On the History of Grammar Among the Arabs*, Kinga Dévényi and Tamás Iványi trans. and eds., Amsterdam, John Benjamins B. V.
- Hartmann, M. (1896-97) "Zum Kitāb des Sībawaihi", *ZA* 11, pp. 63-78.
- Jahn, G. (1894) "Zum Verständniss des Sībawaihi: eine Erwiderung", *ZDMG* 48, pp. 1-21.
- trans. & comm. (1895-1900) *Sībawaihi's Buch über die Grammatik*, 2 vols., Berlin, Reuther & Reichard. (Repri., Hildesheim, Georg Olms, 1969)
- Killeen, C. G. (1970) "Classical Arabic", *Linguistics in South West Asia and North Africa*, Current Trends in Linguistics vol. 6, T. A. Sebeok ed., The Hague, Mouton, pp. 413-438.
- Kinberg, N. (1977) *Hypothetical Conditionals in Arabic: A Study of "LAW" Clauses*, Michigan, Ann Arbor.
- Lewin, B. (1970) "Non-conditional 'if'-clauses in Arabic", *ZDMG* 120, pp. 264-270.
- al-Nassir, A. A., (1993) *Sibawayh the Phonologist*, London, Kegan Paul International.
- Owens, J. (1990) *Early Arabic Grammatical Theory*, Amsterdam, John Benjamins B. V.
- Peled, Y. (1992) *Conditional Structures in Classical Arabic*, Wiesbaden, Otto Harrassowitz.
- Schramm, G. M. (1962) "An Outline of Classical Arabic Verb Structure", *Language* 38, pp. 360-375.
- Suyūṭī, J. (1979) *Buḡyat al-Wu'āh*, Muḥammad Ibrāhīm ed., Beirut, Dār al-Fikr.
- Talmon, R. (1997) *Arabic Grammar in its Formative Age: Kitāb al-ʿAyn and its Attribution to Ḳalīl b. Aḥmad*, Leiden, Brill.
- Troupeau, G. (1983) "Les 'partes orationis' dans le Kitāb al-Uṣūl d'Ibn al-Sarrāj", *The History of Linguistics in the Near East*, C. H. M. Versteegh eds., Amsterdam, John Benjamins Publishing Co., pp. 143-152.
- Versteegh, C. H. M. (1993) *Arabic Grammar and Qur'ānic Exegesis in Early Islam*, Leiden, E. J. Brill.
- Wright, W. (1896-98) *A Grammar of the Arabic Language*, 3rd ed., Cambridge, Cambridge University Press.
- 池田修 (1968)「9世紀以前のアラビア語研究の歴史」『オリエント』11巻第3-4号 pp. 121-160.
- (1969)「10世紀以降のアラビア語研究の歴史」『大阪外国語大学学報』22号 pp. 35-49.
- 石橋幸太郎他編集 (1977)『現代英語学辞典』成美堂
- 宮内秀雄 (1955)『法・助動詞』英文法シリーズ第13巻 東京 研究社
- 森口明美 (1999)「アラブ散文文学における文語アラビア語の通時的変化について」大阪外国語大学修士論文